
人間天使と性別人間

驟雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間・天使と性別の人間

【NZコード】

N6191Z

【作者名】

驟雨

【あらすじ】

ごく普通の人間として、吸血鬼 グレイのパートナーを務めてきた佐川紅丞。だが、彼はある日、突然、人間を辞めてしまう……！？ 今回は性別・人間シリーズ4作目。前作「性別・人間と魔界少年」から見た方が多分わかりやすいかと。

プロローグ

「俺、お前の事が好きだ。」

……あの告白から、3ヶ月半くらいたつた頃。

告白された当の本人、安藤未来は、一向に返事を返してくれない。
それどころか、暁文とグレイにベッタリなようだつた。

フラれたか？と思ったが、未来に限つて断りの返事を返してくれないのは、どうもおかしい。

あいつは、人一番正義感が強いんだ。返事なら必ず返してくれるはずだ。

でも、それがない。

まさか……忘れた？

自然消滅つて奴か？

そんな事……あるのか？

にわかには信じられない。でも、あり得ないとも言い切れない。

現に未来は、学校で俺と会つても、部活の話とか、グレイの話とかしかせず、告白の件については一言も口をきかない。

未来は、俺が告白したことを……忘れてるのか？

そうだとしたら、もし、そうだとしたら……もう一度、告白するべきなのだろうか？

……無理だ。

あの、胸の奥で、心臓が張り裂けそつになる緊張感……もう今の俺には耐えられそうにない。

もう、諦めるしか無いのか……。

そんな風に、若干ネガティブになりかけていた俺、佐川紅丞。
そんな俺は、ある日突然、人間を辞める羽目になつた。

プロローグ（後書き）

今回はまさかの紅丞視点。友人に宣伝していただけに、勝手にプレッシャー感じています。

……と、ここでとりあえず、主人公の紅丞についてちょっと説明を。

佐川紅丞

年齢：18歳、高校3年生（今作から）

身長：165センチ。

未来に告白した人物。見た目は学校で上位を争うイケメンだが、性格は打たれ弱く、涙弱く、女々しい。

こんなとこですね。身長165センチって高いんだか低いんだか判断ないです。

事故

「んー……。」「

朝。眩しい朝日が部屋に容赦なく入り込み、俺は目を覚ました。

「眩しつ……。」「

そういうえば、昨日、寝る前にカーテンを閉めるのを忘れていた。

「……寒い。」「

寒さに負けて、毛布をかぶる。

もう4月だが、北の大地はまだ寒い。

実は、1週間前から高3になつたのだ。

てことは、未来は高2。

……あと1年で、未来と離れてしまつ。

思えば、未来に恋をしたあたりから、進学活動とか、就活とかが全く眼中に無かつた。未来のことで頭がいっぱいだった。

「はあ……。」「

また今日も学校に行かねばならない。正直言つと面倒だが、いかなかつたら未来に怒られそうなので、早めに支度をする事にした。

部屋を出て、階段を降りてキッチンに行く。

「喉乾いた……。」「

キッチンに行き、蛇口を捻る。

水が 出ない。

「あ……水道工事で水出ないのか……。」「

家の近くで水道工事を行つてゐるため、現在我が家は断水中。仕方ないので冷蔵庫に何かないか探すこと。

「えーと、飲み物飲み物……何も無えな……。」「

近頃、買い物に行ってないせいで飲み物が一つ無かつた。

「どーすっかなあ……ん?」

ふと、冷蔵庫の隅に、銀色の瓶を見つけた。……大きさはだいたい、酒の一升瓶と同じくらい。

「なんだこれ……グレイのか?」

持ち上げてみると、物凄く重たい。多分、満杯状態なのだろう。

そういうば……以前、グレイが、俺の血をコツコツ貯めていたとか言ってたな。

「てことは、これ、俺の血か……。」

銀色の瓶をまじまじと見つめ、それを冷蔵庫から取り出す。

ふたを開け、そつと匂いを嗅いでみた。

……案の定、血の匂いがした。

「喉乾いてるし……別にいいか。」

まあ、俺の血なわけだし、飲んでしまっても、本体がいこいわ
けだから、怒られはしないか……。

瓶の中の血をコップには移さず、俺はそのままラップ飲みした。

「紅丞、おはよー。」

眠い目を擦りながら、グレイがキッキンに入ってきた。

キヨロキヨロとあたりを見渡し、俺の姿を見つけた。

「紅丞ー。何して……紅丞つ！？」

グレイは驚愕した。

そりやあ、そりやあ。せつかくコツコツ貯めてきた血を田の前で
飲まれて、驚愕しない方が変だ。

でも、グレイが気付いたときにはすでに遅く、俺は瓶の中の血を一滴残らず飲み干してしまっていた。

「つ……ふうー……。」

味は、やつぱり血の味がした。……でも、何かが変だつた。何というか、酸つぱいような、甘いような……人間の血って、こんな味だつたつけ？

疑問を感じつつ、グレイの方を見た。

グレイの瞳は、真っ青になつていた。

「……紅丞、まさか、全部飲んじやつたの……？」

グレイがか細い声で質問してきた。

「そうだけど……何だよ？ 別に全部飲んでも良いじゃねえか。どうせ俺の血なんだろ？」

俺の言葉に、何故かグレイは首をぶんぶんと左右に振つた。

「……違う。それ、紅丞の血じゃない。」

「はあ？……じゃあ誰のだよ？」

俺からの質問に、グレイは俯きながら答えた。

「……の。」

その言葉は、小さすぎて俺には聞こえなかつた。

「……聞こえねえよ。もつとハッキリ言つてくれ。」

「だから……僕の血なんだよ。それ……。」

「はあ？」

「グレイ、「冗談はやめる。」

「……本当だよ。」

「じゃあ、何で自分の血なんか貯めてるんだよ？」

「そのうち、何かに使えるかなと思つて……。」

グレイの顔や瞳が、だんだん悲しみを帯びてきた。

そして、こんなことを言ひだした。

「……紅丞、人間が二十歳になる前に吸血鬼の血を飲んでしまった
ら、人間じゃ無くなっちゃうかもしないんだよ？」

今度は俺が驚愕した。

「……え？ それって、どういうことだ？ 確か俺、グレイの血を飲んで
しまったわけだよな？ てことは……え？ 俺、人間じゃなくなっちゃ
うの？」

「……グレイ、ちょっと待つてくれ、それって、どういう…。」
衝撃の事実に、おびえた反応を見せる俺を後目に、グレイは淡々と
話し出した。

「……そのまんまの意味だよ。人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、
人間は、人間には無い力を手に入れる……つまり、人間じゃなくな
っちゃう……ってことだよ。」

「そ、それじゃあ、俺……。」

「でも、紅丞の場合は違う。……紅丞は僕の 天使と吸血鬼の血
を同時に、しかも大量に飲んじやつたから、もしかしたら、命に関
わるような変化が出てしまうかもしれない……。」

「い、命……？」

「うん。ハツキリ言うと……。」

グレイは少し言いにくそうな顔をした後、すぐに俺の目を見て、こ
う言った。

「もしかしたら、紅丞は……”天使”になっちゃうかもしれない。」

「…………え……？」

「俺が…………”天使”？」

事故（後書き）

こいつではグレイについて軽く説明を。

グレイ

年齢：21歳（多分）

身長145センチ。

紅丞のパートナー。吸血鬼であり天使。一人称は「僕」だが、一応女の子。性格は泣き虫で甘えん坊だが我慢しがちなところがある。

ちょっと、キャラの誕生日とか設定しこうかな…

作者自身が早生まれなもんで、この時期何歳なのかわからない部分があるんですね…

説明

僕の血は、その全体の約7割が天使の血で出来ている。

その血を、紅丞は“大量”に飲んでしまった。

確かに、成長過程の人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、人間では無くなってしまう。それは事実。

吸血鬼の血”だけ”を飲んだのなら、未来ちゃんのように、性別が増えたりするだけで済む。

でも、今回はケースが違つた。

紅丞は、僕の血を、“大量”に飲んだ。

……大量という部分が重要になる。

これはあくまで推測だけど……7割天使、3割吸血鬼の血を飲んだ紅丞は、吸血鬼の血の作用で人間にはない力を得ることになる。そして、その力とは、同時に摂取した天使の血に、吸血鬼の血が作用し、紅丞の中にある人間の血の部分、およそ7割を天使に変えてしまうというもの。

……簡単に言うと、僕の中の吸血鬼の血によつて、紅丞の身体全体の血の割合が、7割天使、3割人間……になつてしまつ。ということ。

以上のことと、僕は紅丞に説明した。

「マジ……かよ……。」

紅丞はがっくりと肩を落とした。

「紅丞……多分、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れると思う……それがどんな変化かは、さすがに僕にも解らないけど……。僕の言葉は耳に入つてゐるのか……解らないけど、紅丞はがっくりと肩を落とし、うなだれたままだつた。

「紅丞、今日は学校、休んだ方がいいよ。未来ちゃんには僕から言つておくから……。」

「……わかった。」

紅丞は俯いたまま、自分の部屋に戻つていった。

説明（後書き）

ちょっとくら矛盾が生じても、作者は気にしない人です。

絶望

「畜生……。」「

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

たった一度の過ちで、自分の運命がいつも簡単に変わってしまう
つたなんて……受け入れることが出来ない。

しかも、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れてしまつ……俺
は、人間ではなくなつてしまつ。

そうなつたら……俺はどうすりやいいんだ?

人間としての生活を……送ることは出来ないのか?

「……未来……。」

ふと、そう呟いてみた。
助けに来てくれる。来るわけないんだ。

今の俺は 絶望だ。何も残らない……。

「……どうすりやいいんだよ。」

仰向けになり、天井を見上げる。

いつそ、このまま一度寝して、起きたら全部夢でした……ならいいの
にな……。

なんて思っていた、その時

ドクンッ

心臓が大きく脈打つた。

「え……？」

今、何が……と思っていると

「うう！？」

急に身体が熱くなつた。

な、なんだ？これ……身体中の血が燃えるよつて熱い……全身から汗
が吹き出でる……。

背中と頭が痛い……苦しい……。

そして

「……うあああああああああ……！」

俺は氣を失つた。

人間天使

「うう……。」

なんだらう……身体がだるい……頭が痛い……。

俺、今まで何してたんだ……？

気がつくと、時計の針は3時を指していた。

「水……。」

断水していることも忘れ、俺は壁づたいに、洗面所に向かって歩いた。

洗面所にたどり着き、すがるように蛇口をひねる。
案の定、水は出ない。

「え？……ああ、工事で断水してんのか……。」

そんなことを言いながら、顔を上げ、目の前に掛けてある鏡を見た。

「……え？」

そこに「写る自分の姿に、驚愕した。

俺の身体は、肌がまるでグレイのような真っ白い色に染まっており、黒かった瞳の色は、絶望を示す青色に。黒かった髪は……澄んだ空のような水色になっていた。

「な、なんだよ、これ……。」

俺の心中を察するように、鏡の中の俺の瞳の色が更に青くなつてい
く。

全て、思い出した。

確か俺……グレイの血を、それもかなりの量を飲んじまつたんだっけ
……。

それで、これが……。

「ひ……笑えねえよ……。」

俺はその場に崩れるよつて座り込んだ。すると

「紅丞……。」

後ろからグレイの声がした。

「グレイ……俺……。」

「……ちょっと、こっち来て。」

そう言つうと、グレイは俺の部屋に行つてしまつた。

俺も立ち上がり、後に続いた。

部屋に行くと、グレイが深刻な顔をして待つていた。

「……ベッドに座つて。」

俺は言われるまま、ベッドに腰を下ろす。

すると、グレイが俺に近付き、いきなり俺の腕を掴んだ。

「……なんだよ、いきなり。」

「すぐ終わるから、じつとしてて。」

グレイの目は、真剣そのものだった。……従うしかない、と思つた。グレイは俺の腕を見つめ、目を見つめ、髪を見た後、こいつ言いだした。

「……髪と肌と目が、完全に天使になつてゐる。」

「えつ……？」

「口開けてみて。」

驚いてる俺に構うことなく、グレイは続けた。

「……仕方なく、口を開けてみせる。」

「……吸血鬼の要素は無いみたい……。もう閉じていよいよ。」

「なあ……グレイ、これ、何をしてるんだ？」

俺からの質問に、グレイは少し冷酷な感じで答えた。

「……さつき言つたでしょ？ 天使の血が7割で、人間の血が3割になるつて。今、その3割の部分を探してるんだよ。……ちょっと、

立つてもらえる?」「俺は立ち上がった。

その瞬間、グレイは俺の身体にしがみつき、胸の辺りに耳をあてた。

「……グレイ? 一体何を

「紅丞、少し黙つて。」

「……。」

数秒後、グレイは俺から離れた。

「心臓の音は人間の時と変わつてない。……多分、残りの3割は、臓器のことかもしれない。」

「……でも、わかつたところで何の意味があるんだよ?」

「いや、特に意味はないんだ。ただ、紅丞が少しでも元気になれば、と思つて……。」

「……気持ちは嬉しい。でも俺の知りたいことはそんなことじやなくて……その……俺は、元の人間の身体に戻れるのか?」

俺からの質問に、グレイは一呼吸おいて、こう切り出した。

「……僕は他にも、誤つて天使になつてしまつた人間の話を聞いたことがあるけど、人間の身体に戻つたなんて話、聞いたこと無い……。」

え?

ちょっと待つてくれ……え?

「じゃあ、俺、一生このままなのか……?」

グレイは悲しそうな顔をして答えた。

「……多分、そうだと思つ。」

「そんなん……。」

嘘……だろ?

一生、このまま……?

こんな身体じゃ、外に出ることも出来ないって呟つる……？

「…………。」

何も言葉がない。

放心状態…時間が止まってるみたいだ。

実際に止まってくれれば、嬉しいんだがな……。

すると

ピンポーン

家のチャイムが鳴った のと同時に

ガチャツと、家のドアが開いた。

……誰だ？こんな時に……。こんな姿じや、人に会えないって呟つるに……。

そして、信じられない声が聞こえた。

「紅丞せんぱーい。いますかー？……安藤ですー。」

声の主は、安藤未来だった。

「み、未来ちゃん！？……なんで来ちゃつたんだろう？」
グレイは、未来の突然の訪問に焦りを隠せない。……もちろん俺も。
「なあ、さつき、学校休むときに、”未来には伝えておく”……みたいな」と言つてなかつたか？あの後、未来になんて言つたんだよ？」

「……紅丞は、夏風邪が酷いみたいだから休む”つて……。」

「あのなあ……今何月だと思ってるんだよ……まだ4月だぞ。明らかに嘘だつて見抜かれるにきまつてんだる。」

「……ごめんなさい。」

謝つてももう遅い。未来は来てしまった。

「……それよりもさ、紅丞。どこかに隠れないと、未来ちゃんにその姿……見られちゃうよ。」

「ああ……わかってる。」

今ここでバレたら、冗談抜きでヤバい。

早くどこかに……と、その時。

ガチャツ、ドアが開き、未来が部屋に入ってきた。そして

「……先輩？」

未来は、俺の姿を見てしまつた。

「……先輩、どうしたんですか？その姿……。」

「いや、これは、その……。」

戸惑う俺、するとグレイが……

「待つて、紅丞。……未来ちゃん、僕が説明するから　」

そして、グレイは、起こったことを全て話した。

「せ、先輩が、人間じゃなくなる……って、そんな……嘘だよね、グレイ？」

「……本当だよ、未来ちゃん。」

「そんなっ……。」

未来は、先ほどの俺同様、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「……未来ちゃん、ちょっと、2人だけで話がしたいんだけど、いいかな？」

グレイがいきなりそんなことを言いだした。

その言葉に、今度は俺が食いついた。

「ちょっと待て、なんで俺抜きなんだ？」

「……紅丞は、聞かない方がいいから。」

そう言つうと、足早に未来を連れて出て行つてしまつた。

「……なんだよ、俺に聞かれたくないことつて……。」

そう言いながら、ふと、ベッドに横にならうと、振り返つたときには、ある異変に気づいた。

「あれ？……服が大きい……。」

さつきまでピッタリだつた服のサイズが、何故か少し大きい。手が袖に入つて完全に隠れてしまつていて。

足の方も、ズボンの裾が床についてしまつていて。

「おかしいな……服のサイズ間違えたか？」

異変はそれだけではなかつた。

……ベッドが高い。

高校入学の時に、高さを合わせて購入したはずのベッドが、異様に高く見えた。

「……どうなつてんだ？」

グレイなら何か知ってるかもしねれない。

俺は部屋を出て、床についてしまっているズボンの裾をまくり、階段を降りた。

リビングでは、グレイと未来が何かを話していた。

……そういえば、俺に聞かれたくないことって、何だろう？
俺は、ドアの影から、2人の会話に耳を傾けることにした。

発見（後書き）

とうあえず登場したので未来の事について紹介を。

安藤未来

年齢：17歳（多分今作から）

身長：159センチ。

暁文のパートナー。正義感が強く、物事をはつきり言わない人が大嫌い。先輩だろうが人外だろうが悪いことをした者には容赦なく説教する。

こんなところですかね。次更新するまでにキャラの誕生日設定しておきます。がんばれ、俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6191z/>

人間天使と性別人間

2011年12月20日21時01分発行